上毛新聞 2025.12.25

点描ぐんま経済

日銀支店長 見聞録

■144■

映画を通じた追体験

映画館ある風景楽しむ

ご存じだろうか、12月1日は「映画の日」だ。1896年11月末に初めて神戸で映画が上映されたことにちなむが、キリが良いということでこの日になったそうだ。

群馬でも芝居小屋での単発上映が行われていたが、常設館が初お目見えしたのは1910年。前橋「みやこ館」だ。のちに「オリオン座」となり、いまは通りの名前に面影を残す。かつて映画は娯楽の花形。50年代、県内には100館近くの映画館があったそうだ。

群馬の興行史を語る上で欠かせないのが、野中家の存在だ。新潟から裸一貫で身を起こした野中倉吉さんが、多くの芝居小屋や映画館を手がけて県民に癒やしの空間を提供した。

その孫・恒雄さんは、終戦直後の9月半ば、仮設小屋で「爆笑漫才大会」を無料開催した。これは、松本幸四郎さんによる、かの有名な「戦災前橋復興舞踏大会」のひと月も前のことだ。また、ことし80周年を迎えた群馬交響楽団の創生期を描いた映画「ここに泉あり」の制作にも深く関わった。

興行王・野中家は、最盛期には、高崎や前橋などで18館もの映画館を運営した。

人びとが集う映画館。その周囲の空気感を楽しむのも一興だ。高崎や前橋のまちなかには、成人映画館があったそうだ。前橋の先輩方によれば、館の向かいに駄菓子や焼きそば、おでんを供するお店があり、子供心に刻まれた思い出が満載だとか。

昨年の映画・観劇等入場料への支出額は、1世帯当たり7千円程度（総務省）。全額が映画鑑賞だとしても、年に数回といったところか。

前橋にきて、職場から徒歩圏内に映画館があるぜいたくを感じている。そこで先日、オール群馬ロケの映画「ブルーボーイ事件」が上映された。トランスジェンダーを公表している飯塚花笑監督は前橋出身。60年前、性自認への差別が裁判で問われた実話を描いた力作だった。

映画は、普段考えないようなことを「わが事」として感情移入させてくれる。同作は、性自認という極めて個人的なことと、社会通念として語られる家族観の相克を描いた。でも本来、この二つは決して同じレベルで語られるべきものではない。押し付けは差別や排除につながると感じた。

年末年始のリフレッシュに、映画館へ出かけてみてはいかが？

宮 将史（みや・まさふみ）
1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職